
魔導戦記リリカルなのはStratoS

杉並

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導戦記リリカルなのはStratos

【Nコード】

N2552BA

【作者名】

杉並

【あらすじ】

3年前の第2回IS世界大会モンド・グロッソ、織斑千冬は弟の一夏よりも「ブリュンヒルデ」という称号、栄誉を優先した。絶望する一夏だったが、彼は別の青年に助けられそして自らの意志で別の道を進むことを決意しこの世界を離れた。3年後に戻ってきた彼の目に自らの生まれ故郷はどのように映るのだろうか…

魔導戦記リリカルなのはStratos、始まります。

第1話「出会い」(前書き)

読切り累計アクセス数が1000を超え、ストーリーの方も少しずつですが出来上がってきたので、このたび連載することを決意しました。

更新は最低でも週1のペースを崩さずにやっていけたらと思っています。

第1話は読切りと変わっていないので、すでに読んだ方は第2話からお進みください。

それでは本編の方へ

その出会いがなければ…あの手を掴まなければ…俺はこの世界で何も知らず、ただ世界に流されて生きていたのかもしれない。だけど俺はその手を掴んだ。今の自分を変えたいと思ったから。選んだ道がどんなに辛くて苦しくても俺は進み続ける…それは自分で進むと決めた道だから。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第1話「出会い」、始まります。

第1話「出会い」

結局、自らの姉は俺を助けには来なかった。彼女は9つ下の弟の命よりも「ブリュンヒルデ」という称号、榮譽を優先したのだ。

薄汚れた廃工場の柱の1つに縛り付けられながら少年は絶望した。

——お前の家族は私だけだ——

両親が消えた時に姉が俺に言い聞かせた言葉が思い出された。あの言葉は嘘だったのか：俺はその言葉を信じて今まで生活してきた。わがままも言わず、姉の不慣れな家事も全部担当してきた。なのに、それさえも否定されたように思えた。

そんな時だった。青白く光る閃光が壁を打ち抜き、俺の周りにいた数人の誘拐犯を吹き飛ばしたのだ。

壁を打ち抜いて廃工場の中に入ってきたのは青のラインが所々に入った白い服を身に纏い、両手に銃——そうはいっても普通の銃ではなく、ロボットアニメに出てきそうな銃——を持った一人の青年。

先ほどの青白い閃光に唯一巻き込まれなかった誘拐犯がようやく我に返り、IS——打鉄——うちがねを身に纏い、入ってきた青年に何か叫んだ。

当時の記憶が既にあやふやになっていることもあってか、何と言っていたのかは詳しく覚えていないが、「何者だ貴様、止まれ！」みたいなことを言っていたのだろう。

しかし、その青年は聞く耳を持っていないのかお構いなしに歩を進める。

それに激昂した誘拐犯は近接用ブレードを展開して青年に突撃した。

――I Sに勝てるのはI Sだけ――

それがこの世界の一般常識だった。そしてそのI Sを扱えるのは女性のみ。この場面のみを誰かが見ていたのならその誰もがI Sを纏った女性が勝つと信じただろう。

だが、その予想は大きく外れることになる。

その青年は右手に持っていた銃を誘拐犯に向ける。その銃口には青白い光が集まっていた。

もしこの時、誘拐犯が冷静な判断ができていれば結果は違っていた

のかもしれない。その銃口に集まっている光の色が自分の仲間を吹き飛ばした青白い閃光と同じ色であったことに気づき、とっさに回避していればあんな一瞬で終了することはなかったのかもしれない。

「考えもなく怒り狂って突っ込んでくるのは頭の悪い奴がやることだ。」

青年は呆れた口調でそう言い、銃の引き金を引いた。

その瞬間、銃口に集まっていた青白い光は誘拐犯に向かって解き放たれ、その言葉通りISごと誘拐犯を呑み込み、反対側の壁を打ち抜いて吹き飛ばした。

「やばっ、出力抑えたはずなのに…またなのはに怒られるな。」

青年の顔はやりすぎたといった表情をしながらも俺のそばにやって来る。

「ちょっと動くなよ。」

そう言いながら銃口から放出される青白い光をナイフのような形に固定して俺を縛っていたロープを切断。そして俺の頭に手を乗せてこう言った。

「一人でよく頑張ったな、もう大丈夫だ。」

たった一言。けどその一言が俺の心のため込んでいた何かを一気に放出させた。少年は助けてくれた青年にしがみついて泣いた。ただ、ただ泣き続けた。

数年後、あの時どうして泣いていたのかを聞いてみると少年は恥ずかしそうにこう言った。

「あの時の俺は、多分さびしかったんだと思います。」と。

どんなに頑張っても褒めてくれる人はいなかった。運動会で1位を取っても、テストで満点を取っても誰も褒めてくれず、「取れて当然」のような反応をされてきた。ずっと姉と比較されてきた。だけど、ただ一人の家族である姉のため、とひたすら我慢してきた。だけど、本当は褒めてほしかった、一緒に喜んでほしかった。たった一言でいいから「頑張ったね」と言って欲しかった。

しばらくたって俺は落ち着きを取り戻し、そしてサイレンの音が鳴っているのに気付いた。その音はだんだん大きくなっていることからこちらに向かっているのだろうと簡単に予想できた。先ほどの爆発音を聞いて黙っている人の方が少ない。

俺を助けてくれた青年は周りの状況を理解しているのか「巻き込まれたら面倒だからさっさと帰るか」と言って去ろうとしていた。そんな彼の手をいつの間にか俺は掴んでこう言った「俺も連れて行ってください」と。

いきなり手をつかまれた彼は最初は困惑していたが、俺の目をじっと見てこういった。

「俺が進んでいる道は険しくてつらい。それでもついてくる覚悟が君にはあるか？」

俺は彼のその眼を見て彼がその言葉の通り今まで非常に厳しくつらい経験を踏んで来たのだらうと感じた。その中には悲しい別れもたくさんあったのだらう。もし彼と同じ道を進めば俺も同じ経験をすることになるのかもしれない。だけど俺はこの世界を自分の目で自分の肌で自分の身で知りたいと思った。たとえどんな悲しい経験をしたとしても俺は知りたいと思った。

だから俺は「はい」と言って掴んだ手をギュッと握りなおした。

少年は「魔法」と出会い、自分が生きてきた世界の、そして両親失
踪の本当の真実を知る。

自分の世界に潜む闇を知り少年はどう思うのか。

物語はこの事件の3年後、この世界に再び少年が戻ってきたところ
から始まる。

胸に抱くは不屈の心、その手に持つは魔導の力。

愛機と共に立ち向かうは女性にしか扱う事の出来ない兵器、インフ
ィニット・ストラトス。

魔導戦記リリカルなのはS t r a t o s

青年との偶然の出会いが少年の運命を拓き、少年―高町一夏―は空
を駆ける。

第1話「出会い」（後書き）

ご意見や誤字脱字等の指摘がありましたら感想の方をお願いします。

オリジナルキャラクター（以降、オリキャラ）はできる限り第1話に出てきた謎の青年以外には出さないように進めていく予定です。

（オリキャラを出しすぎると読みにくくなりそうなので…）

第2話「入学」

世界で初めて男としてISを起動させてしまったことによりIS学園への入学を強制される一夏。IS学園への入学は一夏にとって吉となるのか凶となるのか。

第2話「入学」(前書き)

お待たせしました、記念すべき連載第2話です。

今回の物語はISの世界を軸として、その世界になのはのメンバーが関与していくといった話にする予定です。

第2話では、なのはの主要メンバーがほんのちよつとだけ出てくる…かも。

第2話「入学」

「（…いくらセシルが同じクラスにいるからってこの状況はさすがにきつい。）」

俺以外のクラス全員…というよりもこの学園に通う生徒は俺以外全員女子生徒。学園職員も用務員に成りすましている本当の学園長を除いて全員女性。それに加えて座席が最前列と真ん中というクラスほぼ全員からの視線を集める絶好の位置。まさに四面楚歌。

「（藍越学園で学生をしながらこの世界の状況について調べてくるのが今回の俺の任務の目的だったのに、よりによって座標ミスって転送位置がズレただけじゃなく、飛ばされた場所に置いてあったISに触れて起動させちゃうなんてな…マジで情けない）」

ちなみにそのことをみんなに話したら「いやいやさすがにそれはないでしょ」って顔された。太一さんとタヌキ（はやて）さんについては大爆笑。

俺はあの時ほど「穴があったら入りたい」と思ったことはない。

「（しかもそのせいで世界で初めてISを動かした男という立場からISを調べてこいっていう追加任務まで課せられるなんて…鬱だ。）」

「はあっ」と大きなため息をつく。しかし、何事も前向きに考えるという持ち前の性格ですぐさま気持ちをあらため、この3年間で習得した並列処理を活かして現時点で発生している問題とその解決策について考えていく。

「（まあ、起きてしまったことはしょうがないとしてこれからどうするかだな。国籍についてはイギリス政府の努力もあって自由国籍権を取得できたけど今後どうするかを考えていけないといけない。ISの情報収集についてはこの学園に入学したことで藍越学園にいる場合よりも洗練された情報が入手できる、ISがどうして俺に反応したのかについては実際にISに乗って調べてみないとわからない、それから俺の機体は…）」

並列処理は一般的な魔導師で3つか4つ程度しかできない。これは人間の脳が与えられた情報を処理する能力に限界があるためだが、一夏はそれを最大15個まで並行して考えることが出来る。現在並行して考えている情報は10個、あと5つ考えることが出来る点を考慮すれば脳への負荷はそれ程大きくはない。だが一夏は8個以上の情報を並行して考える時、脳への負荷を小さくしようとして思考のみに意識を集中させてしまうという癖があった。

だからだろう、教室に副担任が入ってきて自己紹介したのにも、クラスメイトの自己紹介が始まったのにも気づかなかったのは…

「…ちかくん、高町一夏くんっ」

「へっ、あっはい。」

下に向けていた顔を上にあげると副担任の：確か山田先生（下の名前は忘れた）が机の前まで来て俺の名前を呼んでいること、そしてまたいつもの悪い癖が出ていたことに気付く。どうやら自己紹介が始まっていて俺の順番まで進んできていたらしい。セシルの方をチラリと見ると「またですか、もう。」といった顔をしている。

「あっあの、お、大声出しちゃってゴメンね。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、本当にゴメンね！でもね、あのね、自己紹介が、『あ』から始まって今『た』の高町くんの番なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？それともやっぱり、ダメかな？」

目の前で山田先生が今にも泣きそうな声で頭をぺこぺこ下げてお願いしていた。

「あ、ちょっと考え事していただけなので怒ってませんし、そんなに謝らないでください。自己紹介もちゃんとしますから、先生落ち着いてください。」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

…本当にこの人は教師なのだろうか、という疑問を持ちながらも一夏は立ち上がり、後ろを振り向く。今まで背中に感じていた視線を今度は正面から浴びる格好。

「（なのは姉も教導の際にこんな感じでいろんな視線を浴びてたんだな…）」

自分の義姉のなのはが教官として多くの魔導師の前に立った際に浴びる視線に近いものを自分も浴びていることに気づき、一瞬しみじみとした思いになりながらも気持ちを引き締めてこう言った。

「初めまして、イチカ・タカマチです。日本生まれのイギリス人でしたが、現在は様々な国の思惑のせいで自由国籍権を取得し、所属は決まっていない状況にあります。変に馴れ馴れしく接すると国際問題になりかねないのでその点にはみなさん注意してください。」

第2話「入学」(後書き)

ということで第2話でした。いかがだったでしょうか。これからもコツコツと話を進めていく予定ですので、今後も宜しく願います。

ご意見、ご感想、誤字・脱字等につきましては感想の方をお願いします。

次回、第3話「再会」

一夏はこの学園で会いたくなかった人と3年ぶりの再会を果たす。

第3話「再会」(前書き)

現在第4話＋主要人物紹介を鋭意執筆中。

主要人物紹介はおそらく一夏が筈と話をした後くらいになるかと思っています。

では本編の方へ。

第3話「再会」

Side 一夏

自己紹介を終えた瞬間、自分の頭めがけてナニカが振り下ろされることに気付いた。自己紹介中に誰かが前のドアから教室に入ってきたのには気づいていたから、その誰かが俺に対してナニカを振り下ろしているのだろう。

「（…山田先生じゃないな。）」

山田先生は俺の左の方で「た、高町くん、その、そういう自己紹介だと、お、お友達、できないよ。もうちょっと、じ、自分の趣味とか、と、特技とか話してくれないかな？」みたいな表情をしてこっちを見ているからだ。

そんなことを考えている間にも俺の頭に近づいてくるナニカ。そしてそれが頭に直撃する寸前、そのナニカは山田先生の顔の前を通り過ぎ、教室のドアにぶつかった。一夏はそれが何であるのかを横目でちらりと確認すると薄い長方形の形をしたものであることを確認した。蹴り飛ばした時に感触からあれが出席簿だろうと推測。そして再び視線を前に向けると、そこには二度と会いたくもなかった人物が立っていた。

Side out

Side セシル

「(先ほどのシーンはみなさんの目にはどのように映ったのでしょうか。おそろくは、黒板に背中を向けていた一夏さんがいつの間にかこちらに背を向けていて、担任と思われる人の手にあった出席簿がこれまたいつの間にか教室のドアにたたきつけられていた程度の認識しかできていないのでしょうか。)」

頭に振り下ろされていた出席簿を一瞬で蹴り飛ばした一夏の姿を見ながらセシルはそのようなことを考えた。その一連の動作が完了するまでにかかった時間は1秒にも満たない僅かなものであったからだ。その様子をただ見ていただだけのクラスメイトのほとんどはセシルの考えているようにしか先ほどのシーンを認識できていないことは間違いない。

「(それとほんの僅かではありましたが、一夏さん、魔法を使用したみたいですね。使用した魔法は身体強化と出席簿を蹴り飛ばした右足の加速：といったところでしょう。こちらは後ほど一夏さんに確認をすることにしてしましても：自らの姉だった方が担任になるなんて、一夏さんにとっては大変いやでしょうね。もちろん私が一夏さんの立場でもこちらからお断りしたいほどいやですけど。)」

セシルはそのようなことを考えながらも一夏と彼の目の前に立っている教師をジッと見る。二人とも無言ではあるが、一夏の目が相手を射殺すかのような目をしていることにセシルは気付いた。そして次の瞬間、一夏の口が動いた。

Side out

Side 一夏

この学園で教師をしていることは知っていた。だが、自分の担任になるとは思っていなかった。その教師の本来の担当学年は3年であり、そしてこの学園の教師の担当学年が変更になったことは今までにないということを経験調査で確認していたからである。

「（…俺という男性操縦者イレギュラーとそれによって発生する可能性の高い俺を巻き込んだ事件に対して迅速に対応できるだけの判断力や実力を持った教師を選んだということか。やっぱりあの用務員がくえんちよう、ただ者じゃないな。となると、頼りなさそうな感じではあるけど山田先生も相当の実力の持ち主ってことになる。」

顔には出していないが、今までに得られていた情報とは異なる事実に一夏は内心、驚いていた。しかし、すぐさま気持ちを切り替え、そこから得られる情報や考えられる可能性について導き出していく。そして、そのようなことを考えながらも一夏はこう思っていた。

「（…しかしまあ、よくも何事もなかったかのような顔をして俺の前に立てるな。」

そう、目の前に立つのは3年前、家族の命よりも自らの肩書・栄誉を優先した人間かぞくだったひと、織斑千冬だった。そのような人を前にして一夏は

こう言った。

「いきなり、しかも後ろからあんなものを無防備な生徒の頭めがけて振り下ろすなんて、教師としてなってないんじゃないんですかブリュンヒルデ、いや織斑先生。」

S i d e o u t

3年前の誘拐事件から約3年、2人の姉弟は再会を果たした。姉であった千冬にとっては嬉しい再会だった。何せ3年間行方の掴めなかった弟が今、目の前に立っているのだから。

しかし、弟であった一夏にとっては二度と会うことはないと思っていただけのこともあってか最悪の再会であった。

第3話「再会」 （後書き）

3年ぶりの再会は感動の再会…にはなりませんでした。出来る限り原作に忠実に、しかしオリジナリティーを加え原作とは違ったストーリーで物語を進めています。が、「もっとこうしてほしい。」「こういった展開が見たい」といったご意見がありましたら感想の方へよろしくおねがいします。

第4話「真実」

イギリス国籍だった一夏が自由国籍権を取得せざるを得なかった理由、そして皆が知らなかった一夏誘拐事件の真実の一端が今、明らかになる。

第4話「真実」(前書き)

3年ぶりの再会…本来であれば嬉しいもののはずなのに、その再会
は彼―高町一夏―にとっては非常に不快なものだった。

魔導戦記リリカルなのはS t r a t o S 第4話「真実」、始まり
ます。

第4話「真実」

「いきなり、しかも後ろからあんなものを無防備な生徒の頭めがけて振り下ろすなんて、教師としてなってないんじゃないんですかブリュンヒルデ、いや織斑先生。」

二人の3年ぶりの再会で初めて交わされた言葉は感動的なものではなく…

「…それはお前の自己紹介の内容に問題があったからだ、織斑。」

そしてその言葉に返された返事もまた冷たいものだった。

「問題…ねえ。ですが俺が言ったことは事実でしょう？ ISを起動させてしまった時の俺の国籍はイギリス国籍だった。だからイギリス政府は俺をイギリスの代表候補生の一人としてこの学園に入学させることにした。だけど、いきなり日本政府が『彼はイギリス国籍を有しているかもしれないが、日本で生まれ、今までの人生の半分以上を日本で過ごしている。その点を考慮するならば彼の所属は日本にあるべきだ。』って主張した。」

「…」

一夏「そして、日本政府のその発言を発端にアメリカやロシアなどの諸外国が何かと理由をつけて俺を自国の所属にしようとした。『敗戦国の日本の復興に大きく貢献した我が国は日本に大きな貸しがある。ならその貸しを彼の所属権を我が国に引き渡すことでチャラにしようじゃないか』とか言ってるね。完全に俺はモノ扱いだ。」

「えっ…そ、そんな…」

一夏「事実ですよ、山田先生…話を戻します、各国の首脳は俺の所属を巡って意味のない議論（ごうごうごうごう）を繰り返した。連日、夜遅くまで…ね。」

「「…」」

一夏の口から出てくる自分たちの知らなかった事実、セシルを除く学生達はただ黙って聞くことしかできなかった。

「だけどいくら議論しても解決策が出てこないことに一部の国々（所属権を主張しなかった国）の首脳たちが不満を持ち始め、そしてついに爆発した。『私たちは一体何のためにここに集められたのか』ってね。結局この不毛な言い争いはイギリス政府が『ならば彼に自由国籍権を与え、IS学園に通う3年間で様々な国の生徒と交流して、どの国に所属するかを決めさせればよい。』と提案し、それを首脳たちが満場一致で賛成したことでしょうやく解決した。もちろんその提案に不満を持っていた国もあったみたいだけど、それ以上に解決策も見えず、時間だけがただ過ぎていくことに不満を持

っていた首脳たちの方が多かったから、認めざるを得なかったんだけどな…それと織斑先生、俺のファミリーネームはオリムラじやなくてタカマチです。」

自らの自由国籍権取得の本当の真実を話し終えた一夏は、最後に織斑千冬が口にした間違いを訂正した。

「っ…いや、お前が何と言おうとお前は織斑一夏であり、私の…弟だ。」

その事実にくラスがざわついた

「え……？高町くんが、あの行方不明になってた千冬様の…織斑先生の弟？」

「それじゃあ、ISに乗れるのもそれが関係してるってこと？けど、今の名字が『高町』になってるのは何か理由があるの…？」

教室中に飛び交う様々な憶測、そしてその内容のほとんどが一夏と千冬の関係について。この二人の関係が良好なものであれば、教室中に飛び交う内容など特に気にするようなものではない。しかし、今の一夏にとってその話題は苦痛以外の何物でもなかった。

彼はあの事件の時、実の姉だった人と決別すると心に決めた。「たった一人の家族」と言いながら助けに来なかった人を尊敬できる姉と見ることはもうできなかった。

だからこそ一夏は片手を机にバンツと叩きつけ、クラスを黙らせてからこう言った。

「『私の弟』だって…？笑わせるなよ。あんたが、俺の…俺の姉であるものか！3年前のモンド・グロツソの決勝戦の時、俺の命よりも自らの栄誉を…肩書きを選んだ、あんたを姉…いや、家族だなんて認められるかよ！」

そう言い残し、一夏は教室から出ていった。この時間は本来授業時間なのだが、彼の口から発せられた驚愕の事実、彼の行動を止めようとする者はだれ一人としていなかった。

第4話「真実」(後書き)

以上、第4話でした。

まえがきを見て『あれっ?』と思われた方もいるでしょうが、4話以降の本編の前書きはこの形で統一しようと思っております。余裕があれば1〜3話の前書きについても訂正していく予定です。それでは今回の話はこれで。

第5話「相棒」

屋上で一人、考え事をする一夏。そんな彼のもとに彼の相棒パートナーであり、良きライバルである彼女が訪れる。

登場人物紹介 その1（前書き）

タイトル通りの登場人物紹介です。

ここでは今までに出てきた主要（と思われる）人達の現時点までで分かっている情報が載っています。

キャラクターによっては原作とは異なる設定になっているので、読んでいただかれた方がこの物語を理解しやすくなると思います。

登場人物紹介 その1

高町一夏…一応、本作の主人公（のはず）。旧姓織斑。12歳の時に開催されていた第2回IS世界大会「モンド・グロッソ」の決勝戦直前、織斑千冬の2連覇を妨害しようとした他国の者に誘拐されるが、とある青年によって助けられ、魔導師としての道を進むことを決意する。本来はイギリスからの留学生として藍越学園に通いながらISに関する情報を集め、報告するのが今回の任務であったが、偶然ISに触れて起動させてしまったため、『世界で初めて男性としてISを起動させた人物』としてIS学園への入学を強制される。一般魔導師でも4つ程度しかできない並列処理を最大15個まで出来るという技能を持っているが、8個以上の情報を処理する場合は思考に意識を集中させてしまう癖がある。ベルカ式を扱う空戦Aーランクの魔導師で階級は1等空士。弟の命よりも自らの栄誉を選んだ実の姉であった織斑千冬やISを世に出し女尊男卑という歪んだ世界を作った白騎士事件の犯人、篠ノ之束を嫌っている。

セシル…第2話から登場。今までの話の内容から一夏と知り合いである可能性が高い。また、一夏が出席簿を蹴り飛ばした時に魔力が発せられたことに気付いたり、使用した魔法の種類を瞬時に判断したことから、魔導師として高い素質を持っていると判断できる。

織斑千冬…一夏の姉だった人物であり、クラスの担任。第2回モンド・グロッソ決勝直前、一夏が誘拐されたことを知るが、「助けに行くのは試合を一瞬で決めてからでも遅くはない」と考え、決勝戦に出場。しかし、決勝戦の対戦相手が自分の戦い方をかなり研究してきていたこともあってか、決勝戦は予想以上に手間取り、一夏の

救出に向かうのが遅くなってしまう。現場に着いた時にはそこに一夏の姿はすでになく、どうしてあの時あんな安易な考えをしてしまったのかと後悔する。そして大会後、一夏がいないという事実から目を背けるために一夏誘拐の情報を提供してくれたドイツへ1年間、教官として出向く。そしてその2年後、一夏がISを起動させたことによつて一夏が生きているということを知り、安堵し喜んだが、彼から「あんたが俺の姉であるものか」と拒絶されてしまう。

山田先生…一夏のクラスの副担任。下の名前は真耶^{まや}。

一夏を助けた青年…双銃使いの謎の青年。一撃でISを倒すことが出来るほどの実力の持ち主であり、「なのは」と呼ばれる人とは何やら良い関係にあるらしい。

高町なのは…一夏の義姉。例の青年と何やらい関係にあるらしい。彼女の両親が一夏を養子として引き取ったことで一夏から「なのは姉」と呼ばれている。

太一…第2話で名前だけ出てきた人物。一夏がISを起動させたことを聞いて大爆笑した人物の一人。

タヌキ…別名「はやて」。太一と同じく、2話に名前だけ登場。ノリとツツコミをモットーに生きている人間の姿をした愛嬌?のあるタヌキと。女性の胸をもむのが日課で、本人いわく「スキンシップ」らしいが、どこからどう見てもセクハラにしか見えない。謎の青年

いわく「ヒト科タヌキ属セクハラ種」の珍人類。

登場人物紹介 その1（後書き）

…どうも人じゃなさそうなのが1人？混じっているようでしたが、それについてはあまり気にしないでください。

本編や番外編についても現在執筆中です。ご意見・ご感想お待ちしております。

第5話「相棒」(前書き)

掲載2日目にして累計PVが15000、そしてお気に入り登録数が50を突破しました。この小説を読んでもださっている皆様、本当にありがとうございます。作者杉並、より一層努力していく所存ですので、これからもよろしくお願いします。

それでは本編スタート。

大空を眺めながら一夏は一人考え事をする。そんな彼の前に現れたのは、この世界で生まれ育ち、彼と同じく魔導師の道を歩む女の子だった。

魔導戦記リリカルなのはStratos 第5話「相棒」、始まります。

第5話「相棒」

場所は変わってI S学園の校舎の屋上、教室から出て行った一夏は屋上に設置してある長椅子に一人、寝そべっていた。休憩時間：特に昼休みであれば数人の生徒を見かける屋上も今がまだ授業時間であるため、彼以外の生徒を見かけることはない。

「（：飛び方は違うけど、あの人もなのは姉も俺の前に広がる青い大空を自由に飛び回って、同じような景色を見ていた。なのにどうしてこんなにも二人は違うんだろうか：）」

目の前に広がる大空を眺めながら考えているのは二人の女性。一人は血のつながった唯一の家族であり姉であった織斑千冬。

——家族の命よりも名声を求めた女性おろかもの

そしてもう一人は、俺を助けてくれた人——鎖藤太一さん——の恋人で、俺を養子として暖かく迎えてくれた高町家の次女、高町なのは。

——姉ひととしても、そして同じ魔導師としても尊敬できる強くて優しい女性。

ちなみに、一夏が太一の家ではなく高町家に家族として迎え入れら

れたのは、太一の家族（両親）がすでに他界していたためであった。それでも太一は家族として迎え入れる予定だったのだが、なのはの両親である高町士郎、高町桃子の二人が「彼に必要なのは親の愛情」と主張し、それを太一も認めたため、一夏は高町家の養子となった。それに加えて、高町家の家族構成が一般の家庭と少し違っていたことも関係していたりするらしい。

「（：俺も同じようにこの空を飛んで世界を見た時、この世界は俺の目にどんな風に映るんだろうか。）」

ISがこの世にその姿を現した時、この世界は変わった。特にこの世界に住んでいる人々の考えが大きく『歪んだ』。

たとえばどんなにその人が優秀でなかったとしても、ただ「女性」であるという理由だけで厚遇され、どんなに優秀であったとしてもただ「男性」であるという理由だけで冷遇され、虐げられる世界になっってしまった。

——ISが女性にしか使えないことによって：

そんな歪んだ世界の中に発生した俺というIS操縦者。
イレギュラー

ISの登場によって虐げられ続けてきた男性おとしたちにとっては俺は男性の地位回復に対する一縷の希望、優遇されてきた女性おんなたちにとっては現在

の地位を揺るがす脅威であり、排除すべき存在。そして一部の者にとっては観察対象であり、IS世界大会2連覇という偉業を成し遂げた織斑千冬^{ブリュンヒルデ}の弟という存在…

「（俺がどう動き、どの陣営に所属するかによってこの世界が再び変わる可能性は極めて大きい。…まあ、一番最後の選択は何があっても選ぶことはないけどな。）」

そう考えながら一夏は左手につけている時計を見て時間を確認する。現在9時50分、2コマ連続での同一授業を採用しているこの学園の2時限目の授業がもう少しで終了する何とも際どい時間帯。3・4時限の授業もサボろうかなどと考えたりもしたが、一夏は今回の任務が「学生をしながら」であることを思い出し、次の授業は最低限のマナーとして、出席だけはしようと決めた。

太一さんやタヌキさんなら「学生の本分はその生活を楽しむことにあり、その楽しみ方には授業を抜け出してこっそり学食に行ったり、昼寝してて授業をすっばかすといったものが含まれていて当然である。」などという自論を持ち出しかねないけど…

しかし、授業終了まではあと20分、そして次の授業まであと40分もある。授業終了と同時に教室に入ってもいいが、それから20分何をして過ごせばいいかわからない。廊下から好奇の目で見続けられるのも精神的に辛い。それならいっそ授業開始ぎりぎりまでここで空でも眺めているかなどと一夏が考えていると…

「…こんなところにいましたのね。」

屋上に一人の生徒がやってきて一夏に話しかけてきた。

この学園に通う生徒で一夏が知っているのは二人。一人は太一さん
経由で知り合ったイギリス人の女の子、そしてもう一人は…とある
人物を思い出してしまうため深くは考えないでおこう。そして現在、
一夏に話しかけてきたのは前者。自分と同じ魔導師の道を歩み、代
表候補生という立場からISについて調査することになっている、
俺の良きライバルであり良き相棒^{パートナー}…

「セシル…いや、ここではセシリアと呼んだ方がいいのかな。」

そこに立っていたのはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコッ
ト・グレアムであった。

第5話「相棒」(後書き)

ここでもうやくセシリアが登場。読者の方も大方予想していたとは思いますが、セシルⅡセシリアでした。

しかし題名が「相棒」なのにセシリアの登場が最後のワンシーンだけというのは…この点については反省しております。

次回以降は題名と内容がかみ合ったものになるよう注意します。

第6話「意図」

久しぶりに再会を果たした一夏とセシリア。再会した二人は今回の任務が言われたような簡単なものではないことに気付き、その裏に隠されたものを考える。

第6話「意図」(前書き)

「魔導戦記リリカルなのはS t r a t o S」の連載開始から2日、累計P Vが20000を超えました。

魔導戦記リリカルなのはS t r a t o Sを読んでもくださった皆様、本当にありがとうございます。出来る限り早いペースで更新していく意気込みですのでこれからもよろしく願います。

それでは本編スタート。

久しぶりに再会を果たした一夏とセシリア。セシリアは任務を言い渡された時から思っていたある疑問を口にする。

魔導戦記リリカルなのはS t r a t o S 第6話「意図」、始まります。

第6話「意図」

「セシル…いや、ここではセシリアと呼んだ方がいいのかな。」

そこに立っていたのはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコット・グレアムであった。

「今まで通り、セシルと呼んでいただいて構いませんわ、一夏さん。」

他人行儀ではなくいつも通りの接し方をセシリア…いやセシルは要求した。だから一夏もそれに応え、今まで通りセシルと呼ぶことにした。

「わかったよ。ところでセシル、今はまだ授業中のはずだけど、教室を抜け出してよかったのか？…まあ、一番最初に出て行った俺が言うのもおかしいかもしれないけどさ。」

「2時間目の授業は自習になりました。みなさんがあんな状態で授業を進めても何の意味ありませんからね。それと、一夏さんに聞きたいことがあったんですけど、出席簿を蹴り飛ばした際に魔法を使いましたよね。使用したのは身体強化と右足の加速といったところでしょうか。」

「やっぱり気付いてたか：使った魔法も言う通りだよ。やっぱりセシルはすごいな。」

「伊達に優秀な先生に鍛えられているわけではありません。ですが一夏さんの並列処理能力の高さも素晴らしいものだと思いますよ。最大15の情報処理できる方なんて管理局中探しても数えるくらいしかないでしょうし。」

「だけど、8個以上の情報を並列して処理すると思考に意識を集中させるトコが問題だな。太一さんからその癖を直すように言われているけど、そう簡単には直らない。自己紹介の時もそれが原因で山田先生が呼び掛けてたのに気づかなかったわけだし。」

「そうだろうと思いました。やっぱり、癖を修正するというのは難しいものですね：それはそうとして一夏さん、今回の任務ですが、おかしな点があると思いませんか？」

セシルは知人の話で盛り上がり上ろうとしていた話を切って、今回言い渡された任務について一夏に問いかけた。彼女は何か思うところがあるらしい。

「おかしな点？任務の内容に関しては特別変なところはなかっただろ？俺もセシルも学生をしながらこの世界の状況：俺は世間の人々の考えを、セシルはISを操縦して得られる情報を集めて報告する。

特におかしいところはないじゃないか。」

「ええ、『任務の内容』については特に問題はありません。問題なのはその任務の中身つまり、重要度です。」

「重要度？」

「情報を集めるだけでしたら私たちではなく機械に詳しいデバイスマイスターやランクの低い局員、現地の調査員でも対応できたはずです。けれど今回の調査にはAランクの私達を選ばれた。とするとこの調査には何か裏があると踏んで間違いはないでしょう。」

展開されるセシルの自論。だが、彼女の自論は決して間違っているとはいえず、むしろそう考えるのが妥当であるかのように思われる。

「言われてみれば確かに任務の内容が軽すぎる。本局も地上本部もそんな簡単な任務にAランクの魔導師を二人も割けるほど人員に恵まれているわけじゃない：けど、どうして俺達なんだ？もしその考えが正しいとして、この任務の裏側に大きな事件が隠されてるのなら、現地出身という理由だけで俺達を選ばれたはずはない。」

「それは私も考えてはているのですが、答えが思いつかなくて：」

しばらく黙って考える二人。一夏はこんな時、太一さんやなのは姉が俺達の立場にいたのならどう考えるのだろうかと考えようとした時…

——ん、太一さん…？

そのワードが一夏の頭に引っかかり、そしてその答えを導き出した。

「セシリア、太一さんたちだ！俺達の知り合いには管理局でも数少ないAAAオーバーの魔導師や騎士の知り合いがたくさんいる。もし俺達だけで対処できなくなったとしたら、俺達を助けるためにみんなが動くとする。だから俺達なんだ。」

もしこの仮定が正しいものだとするなら、この任務はやはり簡単なものではなく、もしかしたら世界を…いや次元世界を巻き込んだ大事件に発展しかねないことに二人はここで気付いたのだった。

第6話「意図」(後書き)

もし一夏とセシリアの考えたものが真実であるとしたら、管理局はとんでもない組織ってことになります。作者は「なのは」のアニメは好きですけど、管理局の「優秀であれば10歳にも満たないような少年・少女達を戦場の中に放り込む」という考えは嫌いです。ですが、今回の話の都合上、管理局という組織についてはそのような立場に立つてもらうことを予定しています。

第7話「幼馴染」

導き出された答えに二人は恐怖し、警戒を怠らないことを決意する。そんな一夏の下に彼のもう一人の幼馴染が姿を現す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2552ba/>

魔導戦記リリカルなのはStratoS

2012年1月8日02時53分発行